

繊細でダイナミック

「タイプは違うが、目指す音楽が同じ」

新保友紀子さんとニコラ・ヴァン・ナースさんの共演

4月12日 14時～ 佐倉市民音楽ホール



ソプラノ歌手 新保友紀子さん

12日の演目は、「からたちの花」(山田耕筰)、「アメーゼング・グレイス」、モテット「踊れ喜べ幸いなる魂よ」(モーツァルト)、オペラ「ホフマン物語」～木々の中の小鳥たち(オッフエンバック)ほか。



ピアニスト ニコラ・ヴァン・ナースさん

ブリュッセル生まれ。演奏活動の傍らベルギーの2つのアカデミーで教鞭を執る。12日は、「愛と死」(グラナドス)、超絶技巧と深い音楽性が要求される「ハンガリー狂詩曲12番」(リスト)のピアノ演奏も披露。

ETC祭り!! 3/28±・29日限り... リリースネットワーク

「冬の前半は、庭の千草」など懐かしい歌たちです。私も子どものころによく歌いました。舞台と客席が繋がってほしいので、一緒に歌っていただけたら嬉しいです。

「今回は二夫妻で。ニコラは、一部と二部を弾き、一部と三部の曲のスペイン情緒たっぷりの「愛と死」、超絶技巧と深い音楽性を要求されるリスト作曲の「ハンガリー狂詩曲12番」です。

「フィナーレは、華やかなフランスオペラの Aria 2曲です。ベルギー、フランス、ドイツ、スイス、オーストリア、チェコなどの劇場やエージェンシーなどの門を叩きました。遠方でも高価な飛行機は使わず夜行列車やバスで半日ある日は一日かけて行きました。

「自分を知って心を磨かなければ 本当に良い歌は歌えない」

◆新保友紀子さんインタビュー特集

「1面のつづき」数えていませんが、これまで100か所くらいは回ったでしょうか。オペラ歌手は皆やっていることなので、これを苦労と言ってしまうのは、心と身体が冷たい中、見知らぬ土地を歩いて歩くのは、心細く寂しいものでした。

「文学座研究所では？」文学座では、役を演じる時によく台本を読み込み、自分自身の経験や想像力を駆使して、役を人間の内面から作っていく作業をします。役を大袈裟に演じるのではなく、「役を生きている」ということのために、心と身体が開放されて自由でなければならぬことを1年間、毎日の授業の中で学びました。これは、オペラや歌曲などを歌うときも全く同じで、今、とても役に立っています。



「友紀子さんにとって音楽とは？」音楽は、人の心を癒したり勇気付けたり、国境や言葉を越えて人の心と心をつなぐ架け橋だと思います。声は正直で、歌う人の性格や人柄、生き様などが表れてしまっています。ですから、声だけでなく、自分を知って、心を磨かなければ、本当に良い歌は歌えないと思います。音楽は、私にとっても、一生勉強です。

「12日にも上演。オペラは公演で大喝采。オペラは、特別な自動人形の役で、特殊な動きをしながらコロラトゥーラの難いアリアを歌います。演技では、四季や文学座での経験が、とても役に立ちました。3時間以上かかる長いオペラですが、わずかに数回の稽古で初日を踏み出しました。役柄が、私の声とキャラクターにぴったり合っていたらしく、お客様にも共演者の方にも可愛

「音楽の力は大きい。日本を離れ海外を回って、世界中には、自分たちで歌うことができて、辛い人など一人もいない人がこんなに多くいることが、とても嬉しいです。最終日のカーテンコールはスタンディング・オベーション、拍手がいつまでも続きました。『アイトとエネアス』のオフの2週間余りは、オペラを歌うために用意されていたのは、心者の方を対象にした、声楽集中講座なども計画の全公演を終え、ドイトとエネアスを歌いました。

